

## 会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第2回高松市創造都市推進懇談会
開催日時	平成25年1月28日(月) 18時30分～20時40分
開催場所	四番丁スクエア 会議室
議 題	(1) 25年度予算に計上する提案事業について (2) その他
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	人見会長，辻委員，中筋委員，中村委員，花澤委員，英委員，広野委員，長田委員，西成委員，山家委員
傍聴者	0 人      (定員 5 人)
担当課および連絡先	商工労政課商工係 839-2411

### 審議経過および審議結果

(1) 25年度予算に計上する提案事業について

資料に基づき、懇談会からの提案事業について説明した。

(会 長)

まず、先日行った会の中で、3人の委員から出た意見の情報共有を行いたい。1つ目は、創造都市の中に多くの市民が参加できるようなプラットフォーム的なものを作ってはどうかという提案がある。2つ目の提案を説明いただきたい。

(委 員)

U-40とは別に、つながれる人がつながり、有志で会を作り、高松市役所の考える創造都市とリンクさせながら、やりたいことをやる積極的な場を作ったらどうか。そこで、何かアウトプットを出し、行政の中でオーソライズしてもらえれば、市民に対して、我々がしていることを伝えられるのではないか。

(会 長)

ただ今の提案について、皆さんからの意見等はあるか。

(委 員)

行政として何を求めているかを明確にする必要がある。対外的なことと、高松市民に対する対内的なことで、ローカルな地域社会の課題に対して、創造的な問題解決とは何か。対外的チームと対内的チームに分けたらおもしろいのではないか。

## 審議経過および審議結果

今、高松にひきこもりの生徒が多い。そういう子どもに対して、創造都市として何ができるのか。商店街活性化も含めて、創造的なことに触れ合える場所が作れたらおもしろいと思う。芸術士の方にきてもらったり、楽しい場所を作りたい。有志で、対外的チームと対内的チームを作りたい。子どもに特化した高松市になれないか。全国1位の子どもに人気のあるおみやげを作る。子ども盆栽とか。リトルワールド的なことができたら、日本中から高松が注目され、自分のまちを好きになるのではないか。創造都市がなにかを市民に知らせる、創造都市がどういうことに役立つのか、例えばひきこもりや不登校児などのケアに一役かっているという実例を作りたい。

(会長)

創造都市とは何かについて説明をお願いしたい。

(事務局)

創造都市という概念があるからには、モデルとなる都市がある。たとえば、イタリアのボローニャとかスペインのバルセロナがある。ボローニャは、大企業がなく、職人やデザイナーや販路を見出すプロがいて、それぞれ独立した中小企業や零細企業が多い。企業の規模は関係なく、プロダクトをやる毎にメンバーを変えて世界に発信して成功しているまちである。その接着剤になっている商工会議所のような組織がある。共通しているのは、文化のレベルが高く、クリエイティブな活動をしている人達を取り込んで、創造的な活動をしていることである。異業種の企業をくっつける1つの力が、文化芸術がもつ創造性である。

高松には、世界に誇れるものがたくさんあるが、それがバラバラで繋がっていない状態なので、それらがどこかで出会って、化学反応が起きて、未知の力が爆発するのではないか。そういうものを期待できるのが、創造都市なのではないか。

これが創造都市だと決まっていたら、それは創造都市とはいえない。逆に創造都市ではない都市を考えたとき、都市固有の現象でなく、文化・歴史が反映されていない都市だと思う。異分野の交流から、クリエイティブなものが生まれるのではないか。偶然生まれているものを意図的に作っていける、それが創造都市なのではないか。

(会長)

創造都市のアウトラインのひとつは、異文化の交流である。もうひとつは、これまでは経済が文化を牽引してきたが、創造都市というのは、規模の拡大が終わっていく時代に、そうではない成長を生み出す中のひとつのヒントである。人口減少とか市場が、縮小している時代の文化が経済を牽引する。そういう時代の発想だと思う。いろんな企業体、組織体の運営・経営そのものを、デザインしていく発想がこれから必要である。そういったことをやりながら、創造的に変化をしていく。創造的とは、具体化する力を兼ね備えたまちづくりである。都市固有のエレメントを作り上げていくことだと思う。

(委員)

ボローニャと東大阪市は似ているが、東大阪市は創造都市ではないと思う。その違いを日本風にアレンジする必要があるのではないか。バルセロナは、10%弱の人が文化的なことに従事している。高松で文化的なことで生計を立てている人が何人いるか。一般の人にとって

は、芸術は雲の上の存在で、ある種、異風で、ある種、宗教的で、ある種おしゃれというイメージで捉える。もっと身近なアートを生み出す対外的なプランが必要ではないか。

(会 長)

3つ目の提案の説明をお願いします。

(委 員)

高松市美術館には、休止中の喫茶室がある。映画館のような拘束力がカフェにもあり、情報発信がしやすく、創造的な空間である。美術館のカフェを活用して、創造的な場を作ればよいのではないか。U-40のメンバー等を中心に、BONSAIと漆器、スポーツ、音楽等をコラボさせたカフェを作る。市民がおもしろがる土壌を作っていくところから始めていくべきではないか。丸亀町3町ドームで開催しているBONSAIカフェも、空間を利用した創造的なイベントである。

U-40としても、瀬戸内国際芸術祭に合わせて、何か具体的なアウトプットをする。やり方のプロセスや予算を透明化して、誰でも真似ができ、何かをやってみようと思う雰囲気作りが重要である。

(会 長)

ただ今の提案について、皆さんからの意見等はあるか。

(委 員)

創造都市は、家や学校や職場でもない第3の場所（サードプレイス）作りではないか。居場所のない子どもが、ひきこもりになるケースが少なくない。居場所があれば心に余裕ができ、自分の世界が広がる。イタリアでは、カフェがサードプレイスとして成り立っているので、そういうものを作れたらいいのではないか。

スポーツ界でも、若者のスポーツ離れが問題になっていて、スポーツも文化のひとつと考える。参加しない人たちに理由を聞くと、時間がないと答える。何か理由がないと行動に移さないところがあるので、目的はないが、おもしろそうだから行ってみようと思う場所がカフェみたいな所になれば、文化的な高松市に近づくのではないか。

(委 員)

カフェは、プラットフォームではないか。全メンバーも参加しやすいし、アイデアも出しやすい。アウトプットとしては、メンバーだけで独占しないで、市民に開かれたものにすることが重要である。

(委 員)

サードプレイスが常連ばかりになって、そこに行けないから、ひきこもるのではないか。おしゃれすぎて敷居の高い所になってしまうので、日本初の行政が経営するうどん店があってもいいのではないか。

(委 員)

東京でやるのと、高松では違う。地方都市のやり方があって、創造都市のカフェをやるとして、常連ばかりになって新しい人が来ないという危惧があるのならば、それを乗り越える案を考える必要がある。

(委 員)

インパクトでいうと、「カフェ高」として、市役所のホールを利用

するのもおもしろい。

(会 長)

参加をすることは、パフォーマンスの示し方である。刺激を受けることは、人間の共通するものであってほしい。そういうのを組み込んで、創造都市がどんな風に成長していくのか。異分野の集合体があり、その人達が何かをして、市民はそれに刺激を受ける。もしくは、認識や参加をすることで経済を生む。それによって、自分で考えて表現しようとする人が増えていく。そういった人の増加が、都市の成長だと考える。

(委 員)

高松市の良いところと悪いところをピックアップし、現状の把握をする。専門家に来てもらい、いろいろな問題について意見交換をしていくことで、知識や人脈のチャンネルを広げていくことに繋がるのではないか。

(委 員)

U-40の中でチーム編成を作り、テーマを決めて、具体的に動いていく方がよいのではないか。事業ひとつとっても、一般市民に情報が入ってこない。高松市役所は、市民にとって近寄りやすいイメージがある。カフェはいい手段だと思うが、駐車の問題等で美術館は利用しにくいので、よい施策が取れたらいいのではないか。

(委 員)

BONSAIカフェをコミュニティセンターでやると行きやすいのではないか。

(会 長)

カフェに行かなくても、高松市で新しい事を始めようと若い人が集まって、自分がその場において、問題の解決に参加できるかもしれないということを認識する必要がある。ここで話し合う創造都市は、10年20年かかるような体質を変えるくらい大きなことである。いかに公共性の高いプラットフォームを作っていくか。行政は公共性のあるところなので、一緒にどうやって情報を発信していくか。市報やフェイスブックを活用して、発信していく方法もあるが、情報発信について具体的な案を出してもらいたい。

(委 員)

市から発信するという発想が限界ではないか。地域に拠点のあるコミュニティセンターを活用する方法もある。地域の課題に対して何かをしたい時に、地域が創造都市のメニューを選び、我々がそこに行って発信する。

(委 員)

トータルで考えたら、学校を活用すればよいのではないか。

(委 員)

短い時間の中で、どれだけ具体化させるか。テーマを決めて、プラットフォームを作りたい。

(委員)

この会の形式に違和感がある。行政側も一個人として参加して、一緒に考えてほしい。本日はどんな結論を目指すのか。

(事務局)

当初予算の事務的な積み上げの時期は終わっているが、いろんなアイデアが出てきたら、25年度当初予算に限らず、その都度予算をつけていきたいと考えている。25年4月から予算執行するものの、3月議会に出す資料を仕上げるのが2月5日である。前回、熱い議論があったので、この熱気を伝えるためにも、スピード感を出すためにも、そこから出たアイデアを一つか二つやってみようと考えている。

(委員)

予算を用意してもらってから、議論してはいけないのか。

(事務局)

事業として企画書が詰まっていないと難しい。これが最後ではなく、2年後3年後も同じように考えて実施していくというふうに捉えていただきたい。思いついてすぐ事務手続きには入れないので、26年度4月から予算に乗せようとするなら、今年7月にアウトラインを決める必要がある。

(委員)

我々が事業収支まで作って、一般公募で委託してもいいのではないのか。

(委員)

あと何回全体会議はあるのか。ワーキンググループ形式での会議を増やすことを提案してもよいか。

(事務局)

来年度は3回である。メンバーでオーソライズされれば、ワーキンググループ形式で受け取る。

(委員)

具体的なテーマがないと、自主的に集まる場合、モチベーションが必要である。

(委員)

たとえば、50万の予算でハードを一つ考えるというのであれば、いろんな議論ができる。予算を期待するのは違う気がするので、事業収支的にマイナスにならない事業で、それを考えることができれば、第三者が手を挙げて、予算を出してくるのではないのか。

(事務局)

これくらいの予算で何かをやる場合、決まった値段の中で受ける方々は、儲けを確保したうえで、残りを有り合わせのもので結果を出そうとするので、その類の予算は難しい。

(委員)

BONSAIカフェは、場所代が要らないから成立する。

(委員)

丸亀町近辺なら廃墟になった所の方がSOHOがしやすい。

(委員)

プラットフォームをどう作るかをやるべき。実現させるには何が必要か。交流人口を増やすことが重要である。外から来る人をいかに受け入れるか。そういった概念を元に、いかに具体化させる話し合いをするか。話し合った内容や課題を懇談会に提出してはどうか。

(委員)

同じ人ばかり集まらないように、テーマや目的別にしてはどうか。仲間がやっている小さな集まりが乱立するのが高松モデルではないか。

(委員)

場所選びが重要である。コミュニティセンターを使うと、各地区の課題は出せるが、高松全体としての戦略が出なくなるという問題がある。

(会長)

一案として、ワーキンググループ形式の会議の経費を予算に計上する提案としてよいか。

その他に事務局から、連絡事項はあるか。

(事務局)

2月24日の創造都市のシンポジウムに委員の皆さんにぜひ参加していただきたい。

それでは、以上で閉会する。

以上